

事に伴う事前調査（第八三一七次調査）で、宮中心部を南北に縦貫する南北大溝SD一九〇一Aから木簡一点が出土したが、断片であり

釈読できない。

また、飛鳥池遺跡の一九九七年度の調査（飛鳥藤原第八四次調査）でも多数の木簡が出土したが、同遺跡は一九九八年度も継続して調査中であり、また木簡についても現在整理途中であるため、次号に併せて報告の予定である。

## 8 木簡の釈文・内容

(1) 「  
大和国高市 池田武市〔朗  
山中〕」 〔出カ〕 137×70×13 011

厚みのある板材に墨書したもので、四周は原形をとどめているが、墨痕は薄い。荷札であろう。

## 9 関係文献

奈良国立文化財研究所『奈良国立文化財研究所年報一九九八一

II』（一九九八年）

同『飛鳥・藤原宮発掘調査出土木簡概報』111（一九九八年）

（寺崎保広）

熊野評は後の丹波国熊野郡で、熊野評の木簡としては二例めにあたる。近代の貢進例は二条大路木簡の志摩国につぐものである。「塙塗」は他の木簡にみえる「塙染」と同義で、保存のために塙をまぶして貢進したものと考えられる。「延喜式」には丹波国の諸国貢進御贊として、「塙塗年魚」がみえる。

ちなみに、「藤原宮木簡」一では「百廿隻」部分だけしか掲載できなかつたが、これは写真撮影以前に盗難にあつたためである。一九九〇年になつて実物の所在が確認され、漸く完形の大贊木簡として日の目を見るに至つたのである。

（寺崎保広）

奈良国立文化財研究所『藤原宮木簡』一の一九二号の上部接続断片が確認され、完形の荷札木簡となることが判明した。

「▽熊野評大贊塙塗近代百廿隻」

243×20×3 033



## 藤原宮出土の「大贊」木簡

